様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２１９２

研究課題名（和文）政治的抑圧からの回復期におけるアジアの子どもの身体・文化・生活の相互変容研究

研究課題名（英文）A Study on the Mutual Change of Children's Body, Culture and Lifestyle in Asian Countries in Recovery Phase from Political Upheaval

研究代表者
佐川　哲也（Tetsuya, Sagawa）

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：７０２４０９９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,900,000円

研究成果の概要（和文）：政治的抑圧からの回復期における子どもの身体・文化・生活の相互変容について，ミャンマーとスリランカを対象国として2019年に当該国の共同研究機関の協力を得て大規模調査を実施し、その成果を「Statistical Data Book of Asian Child Survey 2019 -Sri Lanka and Myanmar- として公表した。
2019年のミャンマーにおける子どもの価値観は，2014年調査と比較して「リーダーシップをとる」「他人との協調する」等において大きな伸びを確認した。スリランカでは，「学校がとても楽しい」者の割合が約９割と諸外国に比べて高い傾向が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
スリランカとミャンマーにおける2019年時点の子ども身体・文化・生活の統計資料を大規模全国調査によって明らかにできたことは，当該国における教育行政にとって有効な資料を提供できた。加えて，当該国の教育・研究組織と連携して共同研究体制を構築できたことは，両国のへの学術・教育協力の点からも有効であった。
スリランカでは，長く続いた内戦の影響が国内各地域の子どもの学校保健と子どもの栄養に及ぼした影響を確認しうる資料を提供できた。ミャンマーでは，軍政から民主化に至る５年間の変化を確認する調査が実現し，この間の子どもの状況の変化を検証する極めて貴重な情報を含む資料を提供できた。

研究成果の概要（英文）：A large-scale survey on the interactive transformation of children's bodies, cultures, and lifestyles during recovery from political repression was conducted in Myanmar and Sri Lanka in 2019 with the cooperation of collaborating institutions in those countries, and the results were published as the "Statistical Data Book of Asian Child Survey 2019 -Sri Lanka and Myanmar-.
The child values in Myanmar in 2019 confirmed significant increase in "taking leadership" and " cooperating with others" compared to the 2014 survey. In Sri Lanka, the percentage of those who " enjoy school very much" was nearly 90%, showing a higher trend than in other countries.

研究分野：子ども学

キーワード：子ども　ミャンマー　スリランカ　大規模調査　ライフスタイル　発育発達

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) ミャンマーとスリランカでは，政治的安定と経済的発展を背景とした教育の充実が徐々に図られてきた。しかし，子どもの発育発達を保障する教育方針や学校健康教育の支援にまでは至っておらず，教育研究機関と連携した調査研究支援と教育の充実支援が期待されていた。

(2) ミャンマーでは 2015 年に軍事政権支配から脱して民主化の道を進みつつあったが，子どもの発育発達上の課題が多かった。特に，佐川 2014 年に実施した調査では，子どもが重視する行動において「自分の意見をはっきり言う」「他人と協調できる」「リーダーシップをとる」「困っている人を助ける」が非常に低い値を示しており，長く続いた軍事政権下において「目立つことを恐れ，他人との協調を捨てて，個人や家族に閉じて自己防衛的に生活してきた」ことの影響が推察された。

(3) スリランカでは 2009 年に内戦が終結し，第２代大統領の下で国の安定化に向けたインフラ整備が進められていたが，学校や子どもに関する報告はわずかであり，内戦が子どもの発育発達や心的性向に及ぼした影響を明らかにする資料は極めて少ない状況にあると推察された。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は，政治的抑圧期から和平親展期に移行するミャンマーとスリランカにおいて，政治的抑圧が子どもの身体・文化・生活に及ぼした影響を全国的大規模調査によって明らかにすることであった。

(2) 研究蓄積が限られている両国においては，教育政策に有効な研究資料を作成することが困難であると予想されることから，大規模調査の実施支援，共同研究・分析支援，教育政策に有効な資料の作成など，日本の研究者が現地研究者と協力して共同研究に取り組むことが期待された。

３．研究の方法

(1) 共同研究を実施するにあたり，当該国の研究組織と共同研究体制を構築した。ミャンマーでは研究支援を続けてきたヤンゴン教育大学と共同研究体制を維持して調査を実施した。特に同大学とは 2014 年に全国３地域で大規模調査を実施しており，2019 年に調査を実施して５年間の比較分析をすることが期待された。スリランカでは保健省及び教育省にアプローチし，同国の学校保健の推進体制を確認したところ，教育省学校保健栄養課が学校給食の拡大を主要目標に掲げており，共通の目的を掲げる教育省と連携体制を築いた。また，子ども研究を拡大することが重要であるとの判断から，ケラニヤ大学社会科学部に働きかけ，共同研究体制を構築した。

(2) 大規模調査の内容は，2014 年にミャンマーを含むアジア４か国で実施した「アジア子ども基本調査」を土台とした。この調査の特徴は，子どもを身体（発育，遊び，家庭内労働等），文化（価値観等），生活（ライフスタイル，自覚症状等）から把握することであり，その相互作用分析が可能である。ミャンマーとスリランカの状況を加味した新しい質問紙を完成させた。質問紙はまず日本語で作成し，倫理審査を受けた上で英語版をスタンダートして完成させた。調査には，現地語版の調査票を用いた。

(3) 調査対象地域や学校，調査対象学や標本数は，両国の教育制度の特徴を考慮して共同研究機関の方針を尊重して決定した。その結果ミャンマーでは，３教育管区の各３地域各３校の第６学年と８学年を対象として，スリランカでは，全９州の５学年と９学年を対象として調査を実施した。

(4) 調査実施は，ミャンマーではヤンゴン教育大学が，スリランカでは教育省が担当し，その経費は日本側が負担した。回収された調査票は当該国においてデータ入力され，日本側に提供された。Excel で作成された数値データは、日本側でデータクリーニングを行い，SPSS を活用して学年別･性別にクロス集計処理を行った。その結果は，金沢大学において「Statistical Data Book of Asian Child Survey 2019 -Sri Lanka and Myanmar-」として作成され，金沢大学リポジトリとして公開された。収集されたデータは，調査実施機関に帰属するものとし，日本側はこれを利用することができると合意した。

４．研究成果

(1) ミャンマーの第５学年の「学校がとても楽しい」者の割合は，2014 年調査の 49.6%から 2019

年調査の 85.8%に増大した。第８学年においては 24.5%から 77.0%と顕著な伸びを確認した。この学校が楽しいと感じる者の割合の増大は，子どもにおいても抑圧的な傾向から解放されつつあると解釈された。

(2) ミャンマー（ヤンゴン市）の第８学年女子の平均起床時刻は 2014 年で 5 時 23 分，2019 年は 6 時 05 分であり，42 分遅くなっていた。就寝時刻は 2014 年が 21 時 28 分，2019 年は 21 時 51 分であり，23 分遅くなった。起床時刻，就寝時刻とも夜型化の傾向が強まった。また，平均家庭学習時間は 2014 年が 2 時間 29 分，2019 年が 2 時間 57 分であり，28 分長くなった。平均テレビ視聴時間は 2014 年が 1 時間 37 分，2019 年が 1 時間 56 分であり，19 分長くなった。これらの結果から，子どもたちの生活が忙しくなり，生活の夜型化の原因となっていることが推察された。１か月あたりの小遣い額は 2014 年が 6,000 チャット，2019 年が 15,000 チャットであり，自由裁量額が増大した。

(3) ミャンマーの８学年全体が「とても大切なこと」と回答した価値観において，2014 年調査で特に低い値を示した「他人と強調する」「リーダーシップをとる」「学校でよい成績を取る」「困っている人を助ける」が 2019 年において顕著な伸びを示しており，民主的な政権下において，子どもたちの価値観が徐々に抑圧的な傾向から解放されつつあることが推察された。

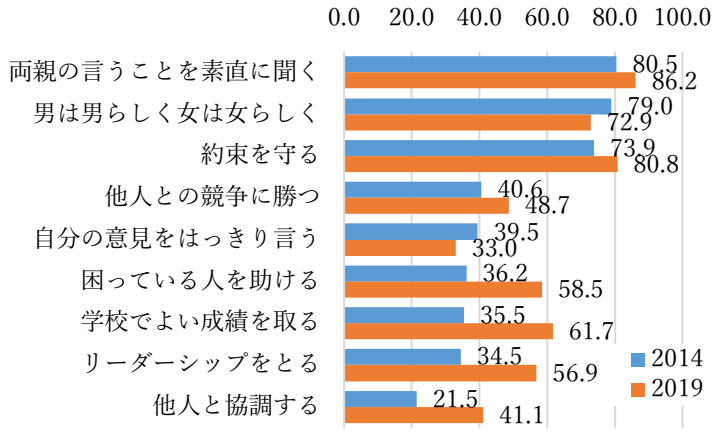

図１　とても大切なこと（８学年全体）

(4) スリランカの「学校がとても楽しい」者の割合は，第５学年男子で 86.6%，女子で 91.0%，第９学年男子で 84.2%，女子で 90.0%と，両学年とも顕著に高い傾向が確認された。学校が子どもたちにとって居心地のよい空間となっていることが確認された。

(5) スリランカ全体の第９学年女子の平均起床時刻は 5 時 10 分，平均就寝時刻は 21 時 40 分であった。平均家庭学習時間は 2 時間 46 分，平均テレビ視聴時間は 1 時間 42 分，SNS 利用時間は 32 分であった。これらの時間を合計すると 5 時間 00 分となり，TV や SNS 等の利用時間の増大により子どもの生活が忙しくなる傾向が推察された。

(6) スリランカにおける起立性調節障害の出現頻度は，第 5 学年男子が 12.9%，女子が 8.4%，第 9 学年男子が 6.9%，女子が 8.2%であった。地域的特徴に注目すると北部州の出現頻度が高く，　第 5 学年男子が 17.9%，女子が 17.6%，第 9 学年男子が 16.7%，女子が 26.1%であった。一方ウバ州の出現頻度が低く，第 5 学年男子が 8.3%，女子が 6.1%，第 9 学年男子が 2.2%，女子が 1.7%であった。

(7) スリランカの第９学年男子の平均身長は 155.6cm，平均体重は 44.0kg であった。第９学年女子の平均身長は 153.1cm，平均体重は 42.5kg であった。全国９州の傾向では，東部州，北中部州で体格がよく，サバラガムア州，南部州で体格が劣る傾向が確認された。教育省は，貧困が発育に及ぼす影響を懸念していたが，平均値で見る限りは，貧困傾向の強い地域の子どもたちの体格が劣っている傾向は確認できなかった。

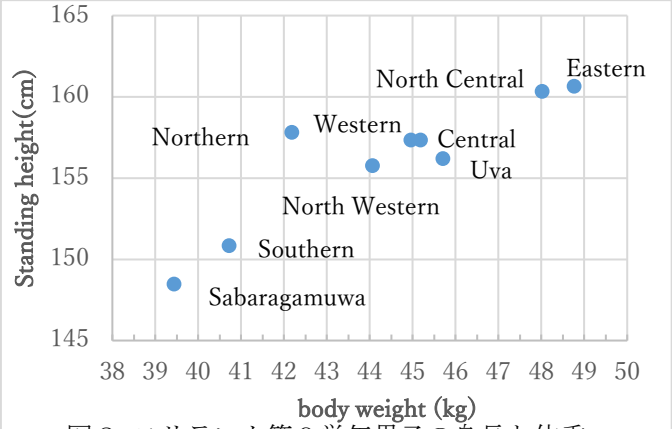

図２　スリランカ第９学年男子の身長と体重

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　1件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 佐川哲也，國土将平，中野貴博，小磯透
２．発表標題 ミャンマーにおける政治的抑圧からの回復期における生徒の価値観の変化
３．学会等名 日本発育発達学会第20回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐川哲也
２．発表標題 海外調査の魅力と子どもの健康を説明する指標としての「学校の楽しさ」
３．学会等名 日本発育発達学会第21回大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Tetsuya SAGAWA
２．発表標題 Growth and Food Intake of School Children in Sri Lanka
３．学会等名 Academic Workshop in Kelaniya University（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Tetsuya SAGAWA
２．発表標題 Fun at School and School Children's Values in Sri Lanka
３．学会等名 Academic Workshop in Kelaniya University（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Takahiro NAKANO
２．発表標題 Basic Lifestyle of School Children in Sri Lanka
３．学会等名 Academic Workshop in Kelaniya University（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Takahiro NAKANO
２．発表標題 OD Situation of School Children in Sri Lanka
３．学会等名 Academic Workshop in Kelaniya University（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Tetsuya SAGAWA, Jayantha Kalansooriya, Renuka Peiris, Kay Thwe Hlanig	４．発行年 2022年
２．出版社 Kanazawa University	５．総ページ数 220
３．書名 Statistical Data Book of Asian Child Survey 2019-Sri Lanka and Myanmar-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	國土　将平 (Kokudo Shohei) (10241803)	中京大学・スポーツ科学部・教授 (33908)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小磯　透 (Koiso Tohru) (40406674)	中京大学・スポーツ科学部・教授 (33908)	
研究分担者	中野　貴博 (Nakano Takahiro) (50422209)	中京大学・スポーツ科学部・教授 (33908)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Quinquepartite Showcase Conference 2019	2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
スリランカ	University of Kelaniya	Ministry of Education		
ミャンマー	Yangon University of Education			